

【原本】FAIクラブの株式投資法

FAI VOL.1

林 輝太郎

はじめに

1,000万円を5年で7億円にした人

ある会員の紹介で、株式の売買で1,000万円を5年で7億円にした人に出会った。

その人を紹介した当所の会員は、従業員300人の工場の社長で、上場企業の下請けの仕事をしていた。紹介していただいた年の2年前の春に会社は倒産し、すべての預金などを差し押さえられたが、商品仲買店に預託してあった500万円だけが難を逃れたのだ。

以後、小豆や大豆の売買をしていたが、倒産の翌年6月から預託してある証拠金で株式の売買をはじめ、半年ちょっとで倍増した。

その社長は倒産後、ビルの清掃をしていたが、仕事先の事務所が株式の売買を手掛けている個人の事務所になっており（看板はある政治団体と宗教団体の分室になっている）、「真面目なのを見込まれて少しずつ教えてもらっているところだ」ということだった。

その政治・宗教団体の下部役員で株式投資をしている人が、1,000万円を5年で7億円にした人で、その人と元社長と私の3人で会ったのだ。

やり方としては銘柄選択を主体とする方法で、一般の投資家が行っているやり方と同じように思えるが、それが徹底している。

まず、上場銘柄1,720（当時）の10年間の月足を描く。1日に1銘柄なら4年半以上、1日に5銘柄なら1年かかる。

そうすると、「下げる」というのがどういうことなのかわかってくるといふのだ。

そして「下げきる、下げきった銘柄」がわかってくる。

しかし、上がらなければ駄目だ。

それらの判断に、30項目のルールを適用する。

1年で倍になればよいという気持ちと目的で、1日の動きには一喜一憂せず、しかし、平均値を有利にもっていきように仕込む（なかには1日ごとの動きを追う銘柄もある）。

なお、月足だから、毎月はじめに前月の月足を描き加えるのだが、1,720銘柄なので早くて4日、おそいと7日かかる。月足を描き足しながら、いくつかのルールに合うかチェックしていく。

そして、ルールに合う銘柄（グラフ）を抜き出し、さらに他のルールに照らし合わせる。この最後のチェックのときだけ会社情報・四季報などを参照する。

1カ月に2～3の銘柄が選ばれる。下げ切った銘柄だから、すべて低位株である。投資雑誌にも新聞にもまったく取りあげられない銘柄ばかりである。

「1,720銘柄とはたいへんですね」

と聞くと、次のような答えが返ってきた。

「ええ、グラフを置く棚だけで13あります。しかし、100万や200万の仕事ではなく、5億、10億の仕事ですから当然です」

たしかにそのとおりだ。

一般の投資家は、事前の準備、売買の用意（用具）にカネ、労力をかけない、かけなさすぎるのである。

市販のグラフを買ってきて事足れりとしている。

やはりそれでは駄目なのであろう。

さて、グラフを自分で描くのはたしかによい勉強になる。しかし、1,720銘柄を1人で描くのはいかにもたいへんである。グラフを描いてくれる商売人がいるから頼めば安く描いてくれる。しかし、それではなんにもならない。

目的は単にグラフをそろえるということではなく、下げきる、下げきった、ということ。「自分でわかるようになること」であるから、少なくとも100銘柄を、それも、自分に興味のない銘柄も描かなければならない。

こういう銘柄選択を徹底させたやり方は、相場技法（売買技法）という個人的能力を重視するやり方と逆の方法で、誰にでも受け入れられやすい。

その会話の後、一部上場銘柄だけでも描いてみようではないか、ということになり、数人で描きはじめた。

資料は全部そろっている。「四季報」「会社情報」のバックナンバーもそろっている。

だが、グラフ用紙だけでも約10万円かかる。

資料を保存しておく棚と、資料を置いておく部屋を都合しなければならぬが、これはむずかしいことではない。

ルールは、私が聞いて書き留めており、これから整理して、わからないところは再度大阪に行って確かめる。

問題はグラフを描くことである。

読者で、「勉強のためにグラフを描いてみよう」という方がいらっしやれば申し出ていただきたい。これから長い仕事として続けていきたいし、研究会などを開くのもよいと思っている。

まず、その条件をいくつか挙げておこう。

- ①メンバー間の協調と秘密を守ってくださること
- ②グラフを100銘柄描ける方であること
- ③グラフが集まって、メンバーの研究室とするための部屋を借りるとき、維持費を負担してくださること（脱会したら必要ない）

もちろん、いずれはもっと具体的なことを決めるが、いまはとりあえず上記のようなものである。

株式現物投資研究会（「研究部会報」1984年3月号より）

先に述べた1,000万円を5年で7億円にした人の件だが（正確には1,200万円を6億9,000万円——1月末の持ち株時価総額、すなわち1年で2倍強）、その年の4月半ばに再度会っていただき、いろいろ尋ねてきた。

こちらが教わる立場であるから質問はするが反論せず、向こうのやり方をすべて吸収するという意気込み、態度で接し、多くのことを教えてもらってきた。

宗教団体に属している方だけあって、まず、カネを持ったときの心構えを強調した。

一般の投資家は「どんな苦しい思いをしてでも利益をあげたい」と口では言うが、あまりに労力を惜しむ、まずその心掛けがよくない。

グラフを1,000銘柄描くことくらいなんでもないことではないか、それによって、教わっただけでは納得できない貴重なことが身をもってわかるのだ。また、一時的に利益になってもすぐに損をしてしまう。これも心構えが悪いのだ。

そんなことを教わった。

1億円持ったときは、世間をみる視野が変わってしまう。5億円のおときはなおさらである。心のおごりだけではなく、変化した視野に驚き、カネを失うのだ。

だから、カネをいれる器、すなわち、その人の人間性をつくる必要がある。それは別にむずかしいことではなく、日常の生活を正すことから出発すればよい。

たとえば、次のようなことだ。

- ①朝早く起きる
- ②人と話をするときは、大きな声で目を見ながら話す
- ③便所から出るとき、次の人が入りやすいようスリッパをそろえる
- ④出された食事は残さない。残すなら、はじめから箸をつけないなどという身のまわりのことから始めるべきである。

その人の経歴をみる

1,000万円を5年で7億円にした人の株式投資の経歴は以下のとおりだ。

上場（二部）会社の課長で、会う3年前に定年退職。それまで20年近く株式売買に全力を注いだ。しかし成績はあがらなかった。ある宗教団体に入り、その団体の資金を運用している機関があると聞き、紹介されてその事務所に行って教わった。

いままでのやり方を全部ご破算にして新しく出発する。

まず、200万円の費用と1年半の歳月をかけて準備した。

上場1,720銘柄のグラフを描き、四季報（会社情報）1年分（4冊）を3部ずつ購入、うち2部をバラバラにして、会社別に分けて年次順に貼り、内容の推移がわかるようにした。

グラフや資料を置く棚は全部で13。定年の3年前に、1,200万円の資金で出発、以後、現在まで手掛けた銘柄は60あまり、ひとつも損をしていない。

「20年あまり、それこそ血みどろの苦勞をして億というカネを持ちたいと努力しましたが、いざ持ってみると、つまらないですね。夫婦で1億円もあれば十分です。今年の内には10億円を超すでしょう。1億円だけ残して、あとは宗教団体に寄付して余生を送ります」

この方法は、十数年前、アメリカで株式投資家として大成功し、ビリオネアとなったがイスラエルにも受け容れられなかったユダヤ人を師とし、大阪の人たちが日本の証券市場を徹底的に分析して、投資活動をはじめたのが最初だといわれている。

そのユダヤ人投資家の手法は、当時はある政党、宗教団体の資金の運用機関の一部門になっていたし、数十人の投資家のきわめて閉鎖的な投資研究会ともなっているらしい。

その投資研究会の入会資格は厳格だ。落ちこぼれも出るが10億円を達成した人も多く、1億円を達成して満足し、退会した人は数知れないという。

それはそれとして、考え方をみていく。

たとえば、当時の東京第一部上場1,007銘柄のうち、

- ・ガス・電力株
- ・銀行株

を除くと918銘柄ある（この方式では二部株も加えるが、いまは第一部株で計算してみる）。この約900銘柄を3つに分ける。ただし、この3つは値頃で線を引いて区分したものではなく、あくまでもこの方式による考え方によって分けたものだ。

低位株300

中位株300

値嵩株300

そして、低位 300 銘柄については過去 30 年を平均して、1 年に 30 銘柄が加わり（つまり下がって低位株になる）、30 銘柄が上昇して低位株から抜けていく。

また、低位300銘柄のうち、業績が好転しているのに人気が出ないなどの理由で、いずれ上昇に転ずると思われるものは約100銘柄である。

その100銘柄を第1次投資対象候補とし、さらに他のルールを適用して厳選する。

低位株を選ぶのは、次の理由による。

- ① 値嵩、中位株は下げる可能性もある。それに対して低位株は下げる余地が少ない
- ② 中高位株は上昇率が低い。たとえば1,000円の株が倍化するには1,000円上げなければならないが、100円の株はたった100円上げれば2倍である
- ③ 心理的に楽である。よって利益を得やすい

1次選定銘柄から2次、3次、4次選定銘柄を選ぶ目的は、上昇タイミングの接近を見つけることで、そのルールはそれほどむずかしいものではない。ごく常識的だが、グループで発見したきわめて特殊な（極秘の）ルールも加える。

上げ途上での利益確保（手仕舞い）と買い直しにもいくつかのルールがある。

しかし、目標はやはり年間2倍とする。

筆者の本を全部読んでいるというこの人が、筆者に対して好意を持ち、そして他言を禁ずるという規約に反してまで余すところなく話してくれたことに十分感謝している。

また、自身が成功者であるだけに、非常に立派な内容であった。

なお、「売買技法という個人的能力を重視するやり方と逆の方向」と書いたが、これは誤りだと指摘された。

また、「1日ごとの動きを追う銘柄もある」というのは、「1日ごとの動きを追うやり方もあり、人によってそれをしてもよい」と訂正する。

すなわち、第4次選択の銘柄を買ったあと、年間2倍を目標に現物を保持してもよいし、また1日ごとの値動きを追って運用してもよい。それは個人で決めることである、ということだ。

以上の詳細は追って述べる。本書のまえがきとして、本書をまとめるきっかけとなった出来事について述べた。

1984年 林輝太郎

目次

【原本】 F A I クラブの株式投資法 VOL. 1

はじめに 1,000万円を5年で7億円にした人	1
-------------------------------	---

序章 | 予備知識

1. F A I 投資法の沿革	16
2. F A I 投資法の成果	20
3. F A I 投資法の概略	29
4. F A I クラブの性格	32

第1章 | データおよび作業順序と売買について

1. 発端	38
2. 売買するための用意（用具）	40
3. 売買頻度について	42
4. F A I クラブとしての作業順序と売買心得	43
1. 毎日の作業と売買	43

2. 毎日の作業	46
3. 3カ月ごとの作業	47
4. 玉帳について	48
5. 「運用」という気持ち	52

第2章 | 銘柄の選定 ルール1～5

1. 低位株とは	56
1. グラフは月足	56
2. 独善的判断を排す	58
2. 月足グラフについて	62
1. 事前の準備	62
2. 変動感覚を養う	65
3. グラフの描き方～FAIグラフ規格	67
4. 「型」がわかるように	70
3. 「型」について	75
1. 3段下げ	75
2. 底	81
3. 切り返し	83
4. 三角形	86
5. 人気の反動	90

第3章 | 買い場の接近 ルール6~16

1. 裸値	94
1. 2種類の食い込み	94
2. 十字の出現	98
1. 直ちに買い	98
2. 買い方の重要性	106
3. 上げの兆し	109
1. 単独陽線と集合陽線	109
2. 長大陽線と切り返し	113
4. トレンドの上抜き	117
1. 確認ライン	117
2. ラインの引き方	120

第4章 | 会社内容の分析 ルール20~26 (ルール16)

1. ファンダメンタルなアプローチ	126
1. 会社内容の分析のルール	126
2. データスリップ	128
1. データスリップとは	128
2. データスリップの作り方	129
3. データスリップの保存方法	131

4.	1年半たったあと	135
3.	データスリップのチェック項目	136
1.	1株当たり純資産	137
2.	日本証券決済株の株主順位および持ち株数	138
3.	人員整理・資産売却	142
4.	経常利益予想	143
4.	新しいデータの採取	145
5.	データスリップによる銘柄の選定	148

第5章 | 買い出動

1.	場帳	162
2.	「下げ止まったか、まだか」だけを考える	167
3.	繰り返し売買	176
4.	5%の確率は30%と高い	183
5.	実践上の細かい注意点	186
1.	場帳のつけ方	187
2.	銘柄の取捨選択とリズム	191
3.	銘柄の数と資金	193
4.	利食いと回転	196
5.	その他の注意事項	198

第6章 | 日々の動き

1. 証券会社とその営業について	204
2. 玉帳の毎月利益、利益率の記入について	208
3. 場帳の作成	210
1. 倍化する銘柄の数	210
2. 値よりも時期	211
3. 波動の統計	212
4. 15日より、30日と60日	216
5. 角栄建設の波動	219
4. 玉帳の分析（スムーズな売買周期について）	233
1. 60日以内が71.2%	235
2. 月ごとの売買回数	236
3. 長期投資という幻覚	240

第7章 | 分割売買

1. 分割の買いと一括売り	244
2. 分割の仕方	248
3. 繰り返し売買銘柄の分割買い	253
4. 休みと再出動～太平洋海運の場帳	259
5. 特訓コースの規定と解説	274
1. F A I 特訓コース実践規定	275
2. 解説	277
3. 地方にいる方への注意	278

序章 | 予備知識

1 ■ F A I 投資法の沿革

序章として述べておきたい予備知識はあまりに多く、どれとどれを書けば理解が深まり、したがって効果があげられるか、ほんとうに迷うほどであるが、ここでは、

- ① F A I 投資法の沿革
- ② F A I 投資法の成果
- ③ F A I 投資法の概略
- ④ F A I クラブの性格

という順で述べていきたい。

あとで細かいこと、たとえば、

- ・この方法でも、具体的には「やり方」が分かれるのだが、それに対する注意
 - ・性格による銘柄の選び方による得失
- などについては、各章ごとの説明（投資方法は30のルールと、いくつかの注意事項に分かれている）の中で、わかりやすい順に述べることにする。

まず、この方式は20年近い歴史を持つ、ということである。20年前といえば1965年（昭和40年）だから、その頃かというと、この点はいまいなのだ。

「F A I 投資法の成果」のところでくわしく述べるが、16年間に1億円以上の利益をあげた人は138名中71名、その中で10億円以上が11名というすぐれた成果をあげているように、実績は驚くほど良いのである。

なによりも「脱落者があまりにも少ない」のは信じられないほどの実績といえよう。

これほどの実績を持ちながら、創立の頃の話がいまいなのは、その頃の人が残っていないこともあるが、はっきりした指導者（たとえば会長とか）が決まっていない共同組織（秘密結社）的なものだったからだと思われる。

だいたい相場に関する成果や風聞は誇大で、また良いところだけが伝わりやすい。

本間宗久（江戸時代の米商人）でさえも、生年、没年がはっきりわかっており、それも死んだのは明治をさかのぼることわずか70年なのに、彼の売買の具体例はひとかけらも伝わっておらず、逆に、専門家（歴史家）の間では、「本間宗久非相場師論」が正しいとされている。

また、陳雅山（中国の投資家）も同じで、彼の遺産は600万両（テール＝中国の古い貨幣単位で銀1/2オンス）もあったといわれ

るが、これは、阿片戦争の賠償が香港の割譲と金600万両であったことから、それと結びつけられたのかもしれない、具体的な数字さえもあまり信用できないのである。

F A I 投資法の源流である大阪のP式投資法にしても、早くも創設当時の事情はあいまいになってしまっている。

しかし、断片的に聞いているところを、注釈をつけながら一応述べておこう。

1958～1960年前後、大阪にいたユダヤ人のマックという人物と、ある宗教団体の株式投資をしていた数人が、日本の株式市場を3年かかって徹底的に分析して、この方式をはじめたのが最初といわれている。

このマックというユダヤ人は米国籍で、米国の株式市場で、同じようなやり方で大成功し、数億（ドル）というカネを個人で儲けたが、イスラエルにも帰れず、太平洋戦争後、米国が日本に進駐していたので再び来日し、この秘密投資クラブをつくったあと、数年で渡米したといわれる。

注

1. マックというのはスコットランドかアイルランドの男子の名前であり、ユダヤ人の名前ではない。名前（姓）の上にMcとつく場合、たとえばマクドナルド（マックダーネル）、マッカーサーなどもスコットランド、アイルランド系の家柄であり、やはりユダヤ系の姓ではない。

マックに似たユダヤ系の名前（姓か名か不明）の略称なのか、米国に生ま

れ育ったので、ユダヤ名以外に米国名を持っていたのかもしれない。

2. 「イスラエルにも帰れず」と聞いたが、本人が行きたくなかったのか、イスラエルに帰ったが生活が面白くないので出国したのか、あるいは何か別の理由でイスラエルに住まなかったのかはまったく不明。

なお、イスラエルの独立は 1948 年。大阪で何人かの人と日本の証券市場の分析をしていた頃の年齢は 50 歳くらいということである。

3. 筆者が後出の S 氏に会ったのは 1984 年 2 月 15 日がはじめてであり、その後回数回会ってはいるが、宗教団体（政治団体でもあるが）の名前は、「株式投資の件（をお話しすること）とはまったく関係ない」として教えてくれなかった。

2. F A I 投資法の成果

S氏のことから述べていこう。

S氏は株式売買歴26年。3年前に定年退職した。退職する3年前までの20年間、株式の勉強を続けてきた。しかし、成果はあがらなかった。

ふとしたことから、この宗教団体のP式投資法を知り、信者になって、投資クラブに加入した。そのときの手持ち資金は1,400万円。そのうち、200万円を準備に費やしたので、この方式による売買開始時には1,200万円の資金があった。

準備に200万円かかったというが、それは、特製のグラフ用紙代が約30万円、「四季報」「株価総覧」などの資料費が10万円、あとは、机、スタンド（グラフを描くのに製図用のスタンドを買った）などの備品とグラフや資料を整理しておく特殊な棚（会員の中に家具製造業の人がおり、使いやすい特別な棚をつくっていた）を買った費用である。

その棚は全部で13ある。S氏の自宅の部屋にその13の棚が並んでいるのは壮観である。

その1,200万円で新しい投資方法での売買を開始したのだが、資金を目いっぱいを使用することは禁じられていたので、1,200万円をフルに運転したのではなかった。

それから5年3カ月、1984年1月末の持ち株時価総額は、6億9,000万円強になっていたのである。

筆者が会ってそれを聞いたのが2月15日だから1月末の時価の計算なのだが、もし、1,200万円から出発したと計算しても1年で2.4倍の複利でふえたわけである。

「この5年の間、手掛けた銘柄は60あまり、損をしたのは1銘柄もありません。市況が良かったのも幸いしたとは思いますが、決して偶然ではありません。すべて努力が実ったものと確信しています」と自信あふれる口調で言う。

そして、「20年余、それこそ血みどろな苦勞をして億というカネを持ちたいと努力しましたが、いざ持ってみると、つまらないですね。夫婦で1億円もあれば十分です。口座名義はいくつかに分けていますが、今年末には10億円を越すでしょう。1億円だけ残して、あとは本部（宗教団体の）の有益な事業に寄付するつもりです」と言う。

なぜ、このS氏と会うことになったのかは少し事情があり、10年ほど前から話をしなければならぬ。かいつまんで述べておこう。

10年ほど前、中小企業（従業員300人ほどの工場）の社長K氏（株主相場歴15年）が事務所に来られ、小豆の相談を受けた。

大阪のO商事で売買しており、証拠金は5,000万円で、売り玉・買い玉両建てになっており、値洗い損は3,000万円を越していた。

会社の資金を流用しているので困っているとのことだったので、とにかく筆者も懸命の努力で玉の操作をし、ごくわずかの損にとどめることに成功した。

K氏の会社は大阪。工場が栃木にあったので、東京には月に1～2度来る。そこで東京の（大衆店でない）地場の商品取引店で取引することになった。

次第に利益が出てきたのだが、1980年頃から利益金をすぐに持っていくようになり、1982年になってからは証拠金も次々と引き出した。会社の経営が次第に苦しくなっていたのだ。そんな折、1982年11月、不渡りを食って倒産した。

取引銀行、証券会社から個人の預金のすべては差し押さえられたが、東京の商品仲買店に預けてあった証拠金と利益金の約500万円だけは難を逃れた。奥さん名義の預金は差し押さえされなかったのだ。大阪では、そのわずかな資金で売買をはじめた。

東京で小豆や大豆の売買を続けながら、預けてある証拠金で株の売買をはじめたのが1983年の6月、そして、1984年の1月までに2倍強になったのだ（1984年8月まで14カ月で約3.9倍）。

このK氏の株式売買については気にとめていなかったが、ある日、大阪からの電話で「私の株の売買をみてくれていますか」と言われ、仲買店に問い合わせた。驚いた。

K氏に電話すると、「今度東京に行ったらお話しします」と言う。2月15日に、そのK氏がS氏を同伴して上京したので会ったのだ。

K氏は倒産後、友人の経営するビル清掃会社に入り、ビルの清掃をしていた。出先のビルの一室に、看板は宗教団体の分室になっているが、部屋の中には株のグラフがたくさんある事務所があり、ある日、夜11時過ぎに行ったとき、グラフを描いている人がいて、それがS氏だったのだ。

S氏は、「株を教えてくれ」というK氏に、意地悪にも近い試験をしたが、K氏は合格した。そして教えてもらい、東京の仲買店にある証拠金で株の売買をはじめていた、というわけだ。

K氏が「東京に行く」と言うと、S氏が「私は林先生の本はすべて読んでいます。会いたいので一緒に連れてってくれ」ということになり、2人で来たのだ。

この分室は、個人の会員たちの研究室になっている。本部（宗教・政治団体直属の株式売買機関）では約90億円の資金の運用をしているとのことで、分室には20年前の記録はないが、過去16年間の記録があり、1億円を達成した人は138名中71名、10億円を達成した人は11名、ということだった。

すると脱落者は67名（48%）しかいないことになり、あまりの成果の良さに、はじめはウソではないかと思ったが、あとで大阪に行き、真実であることを確かめた。

注

1. 138名の資金の最低は100万円（100万円が最低の規定）、最高は2,000万円くらいで、S氏の知るかぎり、それ以上の人はいない、という。
2. 138名というのは、現在売買途中の人を含んでいない。

3. 1億円を達成して退会した人は60名いるわけだが、会報3月号には「満足して退会した」と書いた。しかし、その後、聞くところでは、1億円を達成して恐ろしくなり、ノイローゼになってやめた人ばかりだということだ。

- たとえば、S氏のところに夫婦で来て「退会したい」と申し出た人は、
- ・いままで損ばかりしてきたのに、この会に入って儲かるようになり、夢みたいだ
 - ・しかし、続けてやっていると、また損をするのではないだろうか、儲かっているうちにやめるべきではなからうか、と不安になる
 - ・1億円も儲けたことが親戚に知れわたると、「カネを貸してくれ」と誰かが来るのではないか、どう断ろう、と悩み、親戚付き合いが悪くなる
 - ・近所でウワサが立つと強盗に入られるのではないだろうか。子供が誘拐されたらどうしよう、と考えてしまう

とうったえたらしい。

「もう、心配で心配で夜も寝られません。おカネを持つことがこんなに恐ろしいこととは知りませんでした。このままだと、夫婦ともノイローゼで死んでしまいます。どうか会をやめさせてください。お願いします」と、ほんとうに眠れないらしく、憔悴して、顔は青ざめ、膝の上に置く手もふるえていたという。

1億の現金を持つということはたいへんなことであり、一般の人は程度の差こそあれそうなる。大阪のこの投資グループでは、新しい入会者には1人同伴者（コンパニオンというらしい）が決められ、グラフの描き方から、細かい注意までを行い、また、苦しいときにはげましたりしている。

それでも、このようにノイローゼになる。

別のタイプの人、1億円持つと気が大きくなって、外車を買って、高級酒場に入り、女をつくったりしてあそび、株式投資のほうはバクチ的になって失敗する。

しかし、この大阪グループは宗教関係なだけに、酒や女で失敗する人はいないらしい。

S氏はそう強調する。

S氏が古い人に聞くと、「やめた人はみんなそうだ」ということを聞いて驚き、1億円を持つ（持てる器量のある）人間になれ、という精神論を新入会員に説教するようになったという。

4. K氏が試験されたのは、

(1)上場株 100銘柄の10年間の月足を描いてくること（1ミリ方眼紙）

(2)描いて行くと、もう一度、その会で使用している方眼紙（1ミリより少し大きい。11センチが100目盛くらいの特別注文の方眼紙）に描き直させられた。

(3)・朝5時に起きろ

- ・他人と話をするとき、相手の目を見て大きな声で話せ
- ・他人と話をし終わったときは、必ず「ありがとうございました」と言え
- ・便所から出てくるときは、次の人が入りやすいようスリッパをそろえよ
- ・出された食事を残すな。残しそうなときは最初から箸をつけるな
- ・椅子に腰かけたとき足を組むな

（他にも数件あるがわずらわしいから省略する）

これらを命じられ、K氏はそれを守ったので、6月から株の売買を許されたという。

138名中67名が脱落しているが、死亡が2名あるほかは、例外なく証券会社のすすめに乗って、会の決定銘柄以外の株を売買したため挫折している。

5. 会の決定銘柄が動かないとき、また、買いそびれたときなど、ついうっかり、昔のように証券会社に「何かないか」と電話をかけ、すすめる銘柄を買い、損になるか、後ろめたさのためか、研究会に出にくくなったケースばかりであるという。

K氏が1983年6月以降売買した銘柄を参考までに右表に並べておく。
(東京のみ。大阪市場と注記してあるのは、東京では商内〈あきない〉が少ないので東京から大阪に注文を出した)

銘柄	買い	売り
大同工業	419 6/24	472 9/2
大同工業	410 7/5	472 9/2
大同工業	462 8/15	472 9/2
間組	268 9/2	343 12/28
間組	253 9/26	356 1/4
東急車輛	289 1/10	
東急車輛	293 1/10	
東急車輛	290 1/11	
大都工業	300 1/25	
間組	285 2/3 (再)	370 2/24
間組	284 2/4 (再)	456 3/26
帝国産業	172 2/22 (大阪市場)	493 8/8 (同)
日東化学	191 3/9	290 6/27
日東化学	199 3/14	310 6/27
帝国産業	158 3/14 (大阪市場)	505 8/8 (同)
化工機	282 6/27	
化工機	289 6/28	
日産ジーゼル	264 8/13	
東急車輛	335 8/16	
日産ジーゼル	264 8/16	
日産ジーゼル	265 8/16	

8/31 現在手持ち

東 急 車 輛	15,000	(289 ~ 335)
大 都 工 業	2,000	(300)
日産ジーゼル	3,000	(264、265)
化 工 機	5,000	(281)

注

1. K氏は会社が倒産し、7億円余の負債をかかえており、S氏もそれを知っているので親身になって指導している。そのためか売買の回転は早すぎるくらいであることを承知して、みていただきたい。たとえば、利食ったその日に他の銘柄を買っているが、これは買いたくても資金がなかったからである。

FAI投資法はもちろん、大阪のP式でも、ごくゆっくりと年間倍増を目指すのが普通である。

また、この期間は日経平均が1,000円安をしたように、市況は良くないときであったことを考えていただきたい。

2. 6月末に日東化学を売ったあと、利益金を1,000万円引き出しているので、その時点の手持ちは少ない。
3. 売買のうち、買いだけで売りの記入がないのは、手持ちになっているわけである。
4. このほかに商品相場の利益が約380万円ある。

3 ■ F A I 投資法の概略

F A I 投資法は資産をふやすための投資方法であり、徹底した低位株投資法といえる。強いて宣伝じみた言い方をすれば「低位株年間倍増投資法」とでも言おうか、とにかく低位株の中から1年で倍増する銘柄を発見し、倍増まで手持ちして売ってもよいし、化けるのを追って利食い買い直しを繰り返してもよい。

どちらでもよいが、原則的には年間倍増が本筋であり、1銘柄を追って売買を繰り返すのは、また別の道に進む目的で行われる。

以下、F A I クラブとしての基本的な考え方を述べる。

第一部上場1,017銘柄（当時）。このうち、ガス、電力、銀行株を除くと923銘柄。

（大阪のP式では二部株も加えるが、F A I 投資法は東京の第一部株のみを対象とする）

この約900銘柄を3つに分ける。ただし、この3つは大まかな値頃で線を引いて区分したものであり、また、あくまでもF A I 投資法による考え方によって分けたものだ。

低位株	約300
中位株	約300
値嵩株	約300

低位株 300 銘柄については 1 年に過去 30 年を平均して 10%、すなわち約 30 銘柄が加わり（つまり下がって低位株になる）、約 30 銘柄が上昇して低位株から抜けていく。

しかし、市場が活況のときも不況のときも、低位、中位、値嵩、それぞれ 3 分の 1 ずつという比率は、不思議と変化がない。むしろ、活況のときは値嵩や中位株が動き、低位株は忘れられた存在になってしまうが、不況のときは低位株が物色され出世するので、上がる銘柄の比率が高いのである。

たとえば、1972年の活況のときは、上昇は22銘柄であったのに対し、石油ショックの翌年1974年は41銘柄にも達したのである。

さて、低位300銘柄のうち、業績が好転したのに人気が出ないなどの理由で、いずれ上昇に転ずると思われるものは約100銘柄である。

その100銘柄を第1次投資対象候補とし、さらに他のルールを適用して厳選する。

低位株を選ぶのは次の理由による。

- ① 値嵩、中位株は下げる可能性もある。それに対して低位株は下げる可能性が少ない

- ②中高位株は上昇率が低い。たとえば1,000円の株が倍化するには1,000円上げなければならないが、200円の株はたった200円上げれば2倍である
- ③心理的に楽である。よって利益を得やすい

1次選定銘柄から2次、3次と選定銘柄をしぼる目的は、上昇タイミングの接近を見つけることで、そのルールはそれほどむずかしいものではなく、ごく常識的である。

だが、F A Iで統計上、また経験上発見したきわめて特殊なルールも加える。上げ途上での利益確保（手仕舞い）と買い直しにもいくつかのルールがある。

そして目標は、前述のように年間倍増である。一見、個人的能力を無視するやり方のように思われるかもしれないが、そうではなく、個人的変動感覚を早く（強制的にでも）養成し、技術的には着実に進んでいこうというやり方である。

また、1日ごとの値動きに一喜一憂することなく、年間倍増を目指すのだが、人によっては、別の目的（たとえば、生活費を稼ぐプロ的な売買に進みたいという目的）のために1銘柄を追い、リズム的な売買を繰り返してもよい。

ただし、その場合も、必ず規則を守り正しい道を進むこと（たとえば、日足グラフによらず場帳による、など）が定められている。

4 ■ F A I クラブの性格

F A I クラブの性格は、人数を限定した秘密結社的なものである。秘密結社について少し触れておこう。

外国には、「投資グループ」と呼ばれる組織がたくさんある。また研究会もよくやる。それも、ごく限られた人たちだけの程度の高いものが多い。ほとんどは秘密結社として運営されている。

“秘密”というとなにやら怪しげな匂いもするが、一般的になったボーイ・スカウトだって、フリーメイスン（正しくはフリー・アンアクセプテッド・メイスン）から派生したもので（フリーメイスン自体は相当に秘密的だが）、ともに世間によく知られている結社である。

このほか有名な組織では、バラ十字団（ロゼクルシャン）などがあるが、これは相当に秘密性がある。

日本古来の能の家元制度は完全な秘密結社であり、そのほか、能ほど嚴重ではないが、小唄、生け花、舞踊などの家元制度もそうだ。また、宗教団体のある種のもの、名門コースといわれるゴルフ・クラブにもそういう色彩がある。

外国の投資グループは日本の、たとえば××投資顧問などと違って、必ず弁護士、会計士が規約、会計を監修することになっている。

だから、日本のように以心伝心とか師弟相承とか精神面を強調しながら、金銭的には家元あるいは特定の人だけが自由にでき、それも、それこそ秘密の中というような暗さはないのである。

伝統の保存、技術の伝承という点で日本の家元制度はすぐれているかもしれないが、それは多数の弟子からの飽くことなき収奪の上に成り立っているという誠に不明朗な面がある。

同じような暗さが日本の投資クラブにも見受けられる。

外国のクラブにはそれがまったくない。そのうえいわゆる「相互扶助」とか「博愛」とか、「王者の技術授与」のように、抽象的な、言わなくてもわかっているような綱領など、日本の家元制度では家元だけにある（自分たちの発展と利益享受をはかるといふ）特権がすべてのメンバーにあるのだ。

つまり、日本の家元制度は、家元一族から弟子までが一体の家族とは言いながら、それはタテマエで、芸、技術の習得、金銭的利益の享受および権力の行使などのすべてが家元一族のみに限定され、他は師範以下最下位の弟子まで、極端に言えば家元に金銭を貢ぐための働き蜂的存在にすぎず、そして、ことあるときはていよく疎外されてしまうのだ。

それが、下克上となってあらわれ、分家、独立、弾圧、離散、波乱の要因となるのである。

外国の投資クラブでは、少なくとも相互扶助、技術の習得、博愛、共同防衛、利益の共同享受については、日本の家元制度の上部の家元一族だけなのと同じなのである。だから外国のクラブ、結社においては、全員が家元と同じ、といってもよい。

FAIクラブのFAIとは、

FREE & ACQUIRED INVESTORS

であり、フリーメイスンの名称を真似たものである。意味は「自由にして努力した投資家」である。

そして、役職（たとえば会長、代行、銘柄選定委員、会計係）を問わず、すべての面で全員が平等である。

①技術の習得と進歩

②利益享受

③研究とその伝授

などのすべてに対して、メンバーは平等の権利を有する。年齢、性別はもちろんのこと、投資経験の多少、投資資金の多寡、居住地の遠近などで差別されない。一方、

①秘密の保持……クラブの秘密、メンバーの個人的事項、投資方法などのすべての事項の保持の義務

②共同防衛……外敵からクラブやメンバーを守るために力を合わせる義務

③共同負担……クラブの維持費、金銭的負担から、グラフ、データスリップ作成などの労力的負担、さらにクラブの向上のための努力などの精神的負担まで

すべて平等の義務を負わなければならない。それを拒否する者は入会できない。それほど価値のあるクラブなのである。

そして、年を経て、実績を積むにつれて、さらに価値を高めていきたいのである。

この点において、メンバー全員に決意と覚悟が要求される。そして、それに十二分に応えられるクラブたり得る努力をしなければならないのである。

注

フリーメイスンはユダヤの秘密結社であり、世界的に知られている。

その綱領にあるといわれる有名な言葉が、

- ・相互扶助
- ・博愛
- ・王者の技術の授与

である。